

2024年 列島春秋

一月	蓮葉氷陸揚げ船に手を置き	山本 勲
二月	凍裂や棘ある言葉だけ生きる	村川三津子
三月	流水接岸人類は轍を踏む	斉藤 郁子
四月	開拓の父母を見ていた谷地坊主	佐藤かよ子
五月	列島の殿を今蝦夷山桜	山田美智子
六月	海霧ごめや無一物めく過疎の村	中島 土方
七月	わたすげに獣の手触り風戦ぐ	中島 加奈
八月	手の届く其処に国後実玫瑰	寺田 保子
九月	蒸留のカスも薄荷の存在感	よしざね弓
十月	地の底を叫び尽くして厚岸草	清水 健志
十一月	雪虫の攫っていった父の杖	松原 静子
十二月	凍て鶴の脚かへてよりもの思ふ	吉田 洋子

◇◇今後の行事予定◇◇

- 第35回総会（紙上） 2月
- 第34回中北海道現代俳句大会 令和7年4月6日（日）午後1時より
かでの2・7
- 第35回北北海道現代俳句大会 令和7年4月20日（日）午後1時より
旭川市ときわ市民ホール
- 第34回北海道現代俳句大会 令和7年6月8日（日）午後1時より
釧路センチュリーキャッスルホテル
講演・五十嵐秀彦氏
- 第10回東北海道現代俳句協会賞作品募集 9月
- 合同句集「東北海道現代俳句」第7集作品募集 10月

◇編集後記◇

会報19号をお届けいたします。今年は6月に北海道現代俳句大会が釧路で開催されます。皆様の振り返りの一助となりましたら幸いです。（斉藤）

～令和6年度 わたしの一句～

四季それぞれの皆様の思い出の一句をお楽しみください。

春

雪解川私の顔が流れゆく
はらからの円居のごとく木の根あく
デニツシユの空気砲みたいな轉り
ミスドにて孫とのデート春の雪
スイートピー斜向いからの正論
現実は何でもなくて雪解風
傘立てに杖ある不安昭和の日
春宵や子の転勤を佳しとして

松原 静子
早川千鶴子
斉藤 郁子
坂下 裕子
中島 加奈
脇本 千尋
中島 土方
吉田 洋子

夏

村という大きな樞夏の雲
郭公が時の継ぎ目を縫い合わす
万雷の三尺玉や鉋路の夜
わが庭にかつと定まる蝦夷萱草
とりたての青紫蘇そえる夕ぐほん
限界って何だ日盛りの集落
いつか着る旅立ちの衣花は葉に
天の川デジタル保存の千年後

粥川 青猿
江波戸 明
寺田 保子
荒川 美恵
佐藤かよ子
村川三津子
横地 妙子
石川 青狼

秋

月上るキリンの首の骨の数
とどくまで継ぎ足す切手うろこ雲
佐平次や見得切るように流れ星
馬耕忌や体育座りして思郷
君見えず濃霧のごとし反抗期

中村きみどり
菅原 釈子
脇本 文子
小飼 紫香
石井ゆかり

冬

ハウス解体傍らに冬薔薇
色彩を飲み込み込みそうな空つ風
午前四時張り子のごとく冬の月
ししやも干す阿寒風の技かりて
波頭掠め漁る尾白鷺
疑問符の足蹴に力み師走風

飯沼 風華
金野 克典
西村 奈津
中村 幸裕
伊藤 やす
山田美智子

鮎橋 郁香
三島千寿姫
中尾 克彦
芳賀 知子
柴野 美幸
三原 美香
清水 健志
よしざね弓
吉野喜代子
山本 勲

釧路現代俳句会作品抄

7月例会

気まぐれな風鈴の音の指揮は風 飯沼 風華
 六月の海フライングして告白 小飼 紫香
 炎天やギョロリと睨む白樺 金野 克典
 パセリ嘔む完結編の肩すかし 斉藤 郁子
 薄暑光市立図書館七階へ 佐藤かよ子
 霊園占拠松蟬扇動篇 清水 健志
 渴かないためのまばたき青葉光 菅原 釈子
 引かず置く勁草の揺れこれからを 寺田 保子
 添え書きを嬉しく読ます夏の空 那珂剣坊子
 Tシャツに汗を吹き出しフットパス 中尾 克彦
 夕立や捕手のマニキュア蛍光す 中島 加奈
 あの頃のボディコンきつし蛇の殻 中村きみどり
 颯門を触らずにおけ土用あい 西村 奈津
 流木の梁もつ 駆通夏座敷 芳賀 知子
 湿原にどよめく真夏のホイッスル 早川千鶴子
 蜜豆や話の最後は不明者のこと 鮎橋 郁香
 ねじり花どこまで追えば燃え尽きる 村川 三津子
 蝦夷梅雨や日がないいち日火を焚いて 横地 妙子
 蜘蛛の巣がアバンギャルドを着飾ってよしざね弓
 せかしよる二番太鼓や青風 脇本 文子
 宇宙船彷徨っている冷蔵庫 脇本 千尋
 梅雨に入る消化不良のジェンダー論 吉野喜代子
 夕焼けて自分の影がふたつある 石川 青狼

8月例会

祈りとも釣鐘人参立ち尽くす 荒川 美恵
 面影の一つ重なるカサブランカ 飯沼 風華
 水馬敢えて十秒クロッキー 小飼 紫香
 楽園の片道切符土用波 金野 克典
 オーバートーリズム八月の瘤またひとつ 斉藤郁子
 とりたての青紫蘇そえる夕ごはん 佐藤かよ子
 標的は演壇にあり 薔薇真白 清水 健志
 ラムネ抜く真昼の何処に突破口 菅原 釈子
 ムックリの夜涼ゆかしき湖畔かな 寺田 保子
 俺を覗る湿原の道ヤチボウズ 中尾 克彦
 太麺のよく絡みそうそんな夕風 中島 加奈
 花火大会赤でいいんだ信号機 中村きみどり
 ニアミスを強いられコスモスのキメ顔 西村 奈津
 無勢なれど抗う気概白紫陽花 芳賀 知子
 卒寿過ぐは想定外の衣替へ 早川千鶴子
 呼吸かかるほどの静かさ日輪草 鮎橋 郁香
 大夏野杖一本を置きざりに 横地 妙子
 大人にも大人のいじめ夏蕪 よしざね弓
 マリンバのトレモロ揺れる秋の水 脇本 文子
 逆数のふとわき上がる処暑の風 脇本 千尋
 世迷い言は門歯に止めよ極暑かな 吉野喜代子
 熱帯夜冷蔵庫まで十三歩 石川 青狼
 雑草の絶えざる庭や虫すだく 荒川 美恵

9月例会

待つことの心足る日や秋あかね 飯沼 風華
 ギター弾く君に集えりキャンプの夜 石井ゆかり
 馬耕忌や体育座りして思郷 小飼 紫香
 きつつきやつぎはぎだらけの樹冠かな 金野 克典
 瞬きは未完のパッションオニヤンマ 斉藤 郁子
 秋を映してふるさと経由釧路川 佐藤かよ子
 草の穂をついばむ雀群れ遊ぶ 柴野 美幸
 勝者なき表彰台に秋蝶 清水 健志
 声の出ぬ夢の如くに鹿の前 菅原 釈子
 機種換へて迷走タップ七変化 寺田 保子
 昆布舟沖に出て行く濃霧かな 中尾 克彦
 蟬時雨すべての間際譲ります 中島 加奈
 上り月キリンの首の骨の数 中村きみどり
 年表にいそうな顔や菊人形 西村 奈津
 花野ゆく「はて」と左脳を励ましつ 芳賀 知子
 星数多百歳生きさうと云はれても 早川千鶴子
 アオバト舞ふ流木は聞き上手 鮎橋 郁香
 天高しよく似た鼻の姉妹笑う 三島千寿姫
 ゆらゆらと華麗な踊り子秋桜 三原 美香
 「こんにちわ。今晚冷酒はいかがです」 村川三津子
 秋暑し人づてにきく墓しまひ 横地 妙子
 女とは年齢不詳毒茸 よしざね弓
 懇ろにうらおもて見せ秋の蝶 吉野喜代子
 ちやきちやきの抜擢真打ち白桔梗 脇本 文子

容疑者は熊げら現場は穴だらけ
グーグルでお尋ね野紺菊と札

脇本 千尋
石川 青狼

家中のシーツを干して秋日和
子のLEGOの上へ上へと秋の雲

よしざね弓
吉野喜代子

どこからを老いと云うやら薄紅葉
あの人もこの人もいないすがれ虫

脇本 文子
脇本 千尋

天の川デジタル保存の千年後

石川 青狼

10月例会

冷凍の御萩の届く彼岸かな

荒川 美恵

ごつい手も農具のひとつ長芋掘る

飯沼 風華

闇伝い呼び声響む鹿の恋

石井ゆかり

十月の光まみれの打球音

小飼 紫香

月さえも吸い込みそうな空つ風

金野 克典

祖母の算段新米の味噌にぎり

斉藤 郁子

新米を研ぐあすの日も安寧に

佐藤かよ子

秋の朝春湖台より蜃気楼

柴野 美幸

毛筆に触覚の反り稲光

清水 健志

とどくまで継ぎ足す切手うろこ雲

菅原 积子

山葡萄撓わたわたわ届かざる

寺田 保子

秋サンマ長い行列背骨かな

中尾 克彦

桃添えてやわらかくなる棺かな

中島 加奈

窓際の秋の金魚を抱く光

中村 きみどり

ししやも干す阿寒風の技かりて

中村 幸裕

どの夢の寄せ集めかな草の花

西村 奈津

分解まで成熟急ぐ草紅葉

芳賀 知子

栗飯に大吟醸をたらし炊く

早川千鶴子

門灯が点けつばなしだ霧走る

鮎橋 郁香

秋風や洗濯シーツの逆上がり

三島千寿姫

小さき手共に見上げる名月よ

三原 美香

星月夜どの星もみな洗ひたて

横地 妙子

11月例会

妣とたつ玄関口や後の月

荒川 美恵

ハウス解体傍らに冬薔薇

飯沼 風華

干し魚秋をつついて耳石まで

石井ゆかり

膝小僧折り合いをつけ落葉道

小飼 紫香

干し柿やミニマリスタの独り飯

斉藤 郁子

錦秋の鉤網線の一人旅

佐藤かよ子

鹿鳴くや湖畔の静寂神聖

柴野 美幸

綿虫め文字変換の画面上

清水 健志

鍵穴にためらい傷や冬隣

菅原 积子

ハロウインの南瓜並びて陽を食めり

寺田 保子

枯れ葉散り空いっぱい青さかな

中尾 克彦

波音となるまで银杏ゆすりけり

中島 加奈

どんぐりの散乱衆議院選挙

中村 きみどり

長き夜や亡き友思う一人盃

中村 幸裕

結び目の瘤のゆるさや小六月

西村 奈津

十月尽自家中毒という滅び方

芳賀 知子

文化の日書架に美智子妃皇室像

早川千鶴子

風花や未だやはきとこある身ぬち

鮎橋 郁香

12月例会

木枯や紙の保険証のゆくへ

荒川 美恵

一灯を加えてみても小夜時雨

飯沼 風華

箱いっぱい惣菜送った雪晴れる

石井ゆかり

小春日や少年のまま吹く笛

小飼 紫香

佐藤家の売り物件とや雪催い

斉藤 郁子

冬の日の電話の声にほっこりし

坂下 裕子

団塊の世代と言われ冬に入る

佐藤かよ子

出世坂駒草の座も冬仕度

柴野 美幸

雪追うや石炭列車の葬送

清水 健志

組まれゆく鋼の足場雪催

菅原 积子

鶴の里拍手明るき音楽祭

寺田 保子

満月の真下の雪の青さかな

中尾 克彦

譲れない国境なんだよ聖菓切る

中島 加奈

雪投げるしっかりあつたまつてこい

中村 きみどり

雪にバタツせまる青空思わずチユツ 中村 幸裕
 ばらばらと骨がほどける雪がふる 西村 奈津
 合わせ柿英気伝うる冬見舞い 芳賀 知子
 年せまる宛行扶持のランチかな 早川千鶴子
 笑へども帰る家なし雪だるま 鮎橋 郁香
 冬句会粹な師匠の白い髭 三島千寿姫
 LINEから初雪便りやって来る 三原 美香
 髪切ると決めた木枯しには逢わぬ 村川三津子
 目隠しの壁の滲みあと古暦 横地 妙子
 ダイエット成功しても雪達磨 よしざね弓
 多生の縁払えば寄り来雪虫 吉野喜代子
 すかさかの境地を遊べ枯木星 脇本 文子
 正しさもへつたくれもない雪しまき 脇本 千尋
 ハツユキノキリンノ頸ヲオモウカナ 石川 青狼

◇会員動向◇

入会 柴田俊子 (釧路)
 新入地句会員 石井ゆかり
 柴野美幸、中村幸裕
 三島千寿 三原美香
 現在会員数 39名
 ・正会員 34名
 ・地区会員 5名

第61回現代俳句全国大会入賞作品

秀逸賞

村という大きな樞夏の雲

音更町

粥川 青猿

佳作

傘立てに杖ある不安昭和の日

新得町

中島 土方

「現代俳句一二月号」より二月特別選者特選

エリザベスカラー冬空と交信す

中島

加奈

現代俳句永年在籍会員 山本 勲(四〇年)

独唱のぎす廢線のここもニホン

第76回釧路市芸術祭市民俳句大会

十月二十日 釧路中央図書館

一位 はまなすの実や晩年がはちきれそう菅原積子

三位 啄木鳥の大工仕事は四拍子 三島千寿姫

五位 ジーンズの自由なすき間秋高し 村川三津子

九位 安楽に死するは難し秋の蝶 早川千鶴子

一〇位 野分過ぐ泰然自若たる湿原 山田美智子

☆佐藤一芳俳句連盟副会長特選

透かし見る一葉の真顔翳雲

中島

加奈

第23回 大とかち俳句賞全国俳句大会

9月21日(土) 帯広 とかちプラザ

●課題句「雲」 投句数八二二句

◎東北海道現代俳句協会賞

☆佐藤宣子特選

夏雲や臍から伸びる命綱

菅原 釈子

◎優秀賞 ☆石川青狼、十河宣洋特選

槍投げの槍さびしかり夏の雲

粥川 青猿

◎佳作 ☆粥川青猿、橋本喜夫特選

蜘蛛の糸あゝの雲間からほつれたか

中村きみどり

◎佳作

焦げ飯は昭和の匂い夕焼雲

粥川 青猿

☆中原道夫特選

浮浪雲全巻読破扇風機

よしざね弓

☆荒船青嶺特選

雲ふたつ立ちて無類の風灼くる

江波戸 明

☆石川青狼特選

天井は仮想の雲や核シエルター

清水 健志

●雑詠句 投句数八八八句

◎佳作 ☆宮坂静生特選

ふるさとは細谷源二と薯の花

松原 静子

☆石川青狼特選

限界って何だ日盛りの集落

村川三津子

☆都賀由美子特選

農機から農機へ光継ぐ夜業

菅原 釈子

☆橋本喜夫特選

夏の雨静かに母の壊れゆく

松原 静子

郭公が時の継ぎ目を縫い合わす

江波戸 明

峰雲の影立ち上る牛の牧

中島 土方

特攻の雲の墓標や蚩舞ふ

早川千鶴子

ラベンダー早や雲の端染めにけり

山田美智子

フラフープもつともつと夏の雲

西村 奈津

夏の雲鳥のかたち切りとられ

小飼 紫香

飽きるまで食り尽くす鯉のぼり

金野 克典

心身のアクセルブレーキ八月

飯沼 風華

牧草ロール十勝平野のドレミファソ

佐藤かよ子

イヴになる葡萄ひと粒外す度

吉野喜代子

モウく暑です木陰集合牛の群れ

三島 千寿

マンモスの糸苔茂る山の木々

石井ゆかり

馬鈴薯や切れぬ庖丁の癒えぬ傷

斉藤 郁子

相添ひてふたりの歩幅青き踏む

伊藤 やす

玫瑰にハーレーダビッドソンでないか石川 青狼



第二回くしろ元町フットパス句会

八月十七日(土) 厳島神社(吟行) 大成寺

参加三十三名

一位 笑えば揺れる青年団旗秋ざくら 菅原 积子

二位 来たれ颱風青年は活断層 清水 健志

以下、関係分

秋波の音雄叫びとなり無敵 小飼 紫香

臨鉄跡オシゼミの声がふくらむ 西村 奈津

散策かパレードなのか夏の波 村川三津子

踏切にQRコード秋涼し 鮎橋 郁香

鉄路錆び折り畳まれた晩夏光 石川 青狼

「くしろ元町フットパス句会」

「夕日フットパス」に参加して

西村 奈津

くしろ元町青年団と日本伝統俳句協会北海道支部、東北海道現代俳句協会ほか後援の「釧路元町フットパス句会」が八月十七日開催された。普段は立ち入ることのできない釧路臨港鉄道跡地を歩き、作句、句会をするという企画である。

来たれ颱風青年団は活断層 清水 健志

笑えば揺れる青年団旗秋ざくら 菅原 积子

もの言わぬ臨港鉄道遠花火 村川三津子

快活な青年たちの団結力と、鉄路跡の寂寥を詠んだ句が目をついた。さらに十一月二日、釧路発祥の地である元町界限を散策し、その後釧路埼灯台から夕日を鑑賞するイベントに参加。

(「くしろ元町フットパスを広め隊」主催) 圧巻の夕日を押んだあとの交流会では有志が俳句を作り発表、鑑賞した。俳句は初めてという人たちにも、俳句に多少なりとも興味を抱いてもらえたのでは、と自負している。

灯台記念日いいねと秋夕焼 小飼 紫香

「追悼 農の俳人・鈴木八駄郎さん」

当協会名誉会長の鈴木八駄郎さんが、令和六年（二〇二四）九月十七日に九十九歳で亡くなりました。

大正十四年（一九二五）清水町御影で開拓農家の三男として生まれ、十四歳のころから俳句を始めます。俳誌「高潮」同人、その後「寒雷」加藤楸邨、「海程」金子兜太に師事。

台湾で終戦を迎え、翌年四月、広島の大竹港に帰還し、ヒロシマの原爆の悲惨さを眼にしました。平成十六年より「原爆俳句展」を帯広にて開催。復員後農業に従事しながら青年運動、農民運動に参加。一貫して農村の改革を目指しつつ文化活動の指導者としても活躍。私の愛誦句（一族忌胡桃焼く火に父母の見え）の根幹はまさに「農の俳人」でした。帯広市市議会議員、北海道現代俳句協会会長、同名誉会長等歴任。北海道の俳壇を牽引して来ました。平成二十九年十一月、現代俳句協会創立七十周年記念大会の帝国ホテルの壇上にて、地区功労者賞を受賞した折りの笑顔は忘れられません。

令和五年七月、帯広市「とかちプラザ」にて第二十九回東北北海道現代俳句大会では、トークセッション「鈴木八駄郎と俳句」を行い、衰え知らぬ語り口と、河東碧梧桐直筆の軸装短冊「狐吊りて駅亭寒し山十勝」を披露し、ご満悦でありました。その一年後の他界であり惜しまれます。

来年度の当協会俳句大会では、粥川青猿さんと青狼のトークセッション「鈴木八駄郎俳句を語る」を企画し、八駄郎さんを偲びたく思います。あらためてご冥福を祈ります。年代順に句を抄出。

『轆轤』（昭和四十三年）

兜太は跋文に「生活のうた」と題し十勝の野面を渡る風の音、そこに降る雪、人々の生活と精神のもろもろの習俗と軌跡が色濃くしみついて、¹しかし、それは作品の肉体として定着し、そのなかに、

生活者の意思の筋目が、普遍的なひろがりを持って刻まれているのである。―と、風土・肉体・精神の一体化した八駄郎俳句の根幹を記す。

野は吹雪酒掌に組ませ父の旅

農人にうすき埃りの霞来し

『方円』（昭和四十七年）

一族忌胡桃焼く火に父母の見え

仔馬はねる公園で昼の星見ゆる

『地景』（昭和六十一年）

薄化粧の少女野菊をとりにゆく

馬臭き家壊さるる野は晩夏

『馬』（平成四年）

起きる笹胎みの馬も微光せり



令和6年12月 十勝文化会議文化祭

『地音』（平成七年）第三十一回海程賞。

雲雀東風ほとけの飯の焚きあがる

キツネ目の男野を焼き寝入りけり

『在地』（平成二十四年）第三十六回海隆賞、第二十七回北海道新聞俳句賞受賞。

からまつに雪しがみつき人は地に

隠岐怒濤秩父狼馬十勝

師楸郎の隠岐怒濤、兜太の秩父狼、八駄郎の十勝馬三体の象徴であり矜持の句。

微光して老いた馬立つ薯の花 青狼

現代俳句の先駆者として活躍し、十勝を拠点に北海道の代表的作家でありました。

～初めての俳句教室～

近年、新規入会者が少ないことから、「初めての俳句教室」を行って俳句人口の裾野拡大を図っています。

石川青狼会長を講師として八月二四日の第一回を皮切りに十月五日、十一月二三日、十二月七日の四回開催。

まず知り合いに声を掛け、そのあと図書館やプラザさいわい等に掲示したポスターや新聞の募集記事を見たという方、くしる元町青年団との交流の中から参加者が出るなど、一応の成果を得ることができました。何より嬉しいのは、この方達の多くが地区会員として登録してくれたことで、来年度も更に多くの受講者が集まるよう工夫してまいります。



《受講者作品》

寺参り友の庭より秋桜

睡蓮の波乗り巧み春採湖

秋味や麴に酔わされべつぴんに

未来への期待と不安霧の街

初霜や書店で見つける愛読書

鍋つきてほんわり浮かぶ羅臼昆布

柴野 美幸

三島千寿姫

石井ゆかり

坂下 裕子

三原 美香

中村 幸裕

『 明けない夜はない 』

東北北海道現代俳句協会 副会長 吉野 喜代子

明けましておめでとうございます。

とは言えここ数年、戦争、パンデミック、貧困、天災等々殺伐としたニュースが国内外に溢れ、悦びのご挨拶もはばかれる思いです。けれど、明けない夜はないと言います。昨年末には、世界の平和・核廃絶を永年訴え続けてきた日本の被団協がノーベル平和賞を受賞しました。人間の英知や善性の尊さを世界に再認識させる希望の灯と感じました。私達もしっかり前を向いていきましよう。

さて、昨年は現代俳句協会本部の体制改革という事態を受け戸惑うところもありましたが、東北北海道地区協会としては会の充実・会員の拡大に向け石川会長の舵取りのもと動きだすことができました。「第一回初心者俳句教室」を八月に開催。その後も回を重ねて参加者も少しずつ増え、さらに句会へ投句や出席をしてくれる方も出てきました。また、地元のサークル団体と交流する機会を得、その流れの中で俳句に親しんでいたかどうかという喜びを共有しました。俳句に関心を持っている人は潜在的にいるのだという確信を得ているところです。

また今年の大きな事業として、五十嵐秀彦氏を講師に迎え、第三四回北海道大会が開催されます。沢山の投句と出席を仰ぎ、成功裡に実施できるようご協力をよろしくお願いいたします。秋には三年に一度の協会賞の作品募集があります。こちらもたくさんのご応募があることを期待しています。

新たな年に向け協会への一層のご協力をお願いするとともに、皆様のご健康とご健吟をお祈りいたします。

芸術祭&墨書展

・芸術祭合同色紙展
10月14日～20日 市立図書館



・墨書展
10月17日より1ヵ月間 プラザさいわい

